明清時代における涼州[1]のチベット仏教寺院とその碑刻史料について

——白塔寺（Tib. shar sprul pa sde）の現地調査報告を中心に——

一般研究（渡部班）研究協力員　伴　　真一朗

はじめに

1247年、涼州において行なわれたチベット仏教サキャ派の高僧であるサキャ・パンディタとモンゴルの王族コデンとの会見はその後の内陸アジア史に大きな影響を与えた[2]。涼州もその中に含まれる河西回廊は、後述するように東西を結ぶ交通路の要衝にあり、諸民族混淆の地である。チベット仏教をも含むこの地域の仏教に関する研究は、上山[1990]をはじめとする敦煌学、西田[1997]をはじめとする西夏学の分野において多くの蓄積がある。

しかし、モンゴル時代以降の河西回廊のチベット仏教については明らかにされている部分は少ない[3]。その理由としてＤＧ等のチベット語編纂史料から得られる情報が少ないことが考えられる[4]。近年、涼州の碑刻史料についての録文と

1　涼州が行政区域の地名として現れるのは前漢からである。北宋、西夏、元は西涼府という。現在は武威市。その範囲は歴代の王朝によって異なり、前漢に置かれた涼州刺史が最も広く、現在の甘粛省を越える。最も狭いのは明代に置かれた涼州衛で、現在の武威市の範囲である。また武威については前漢より涼州刺史管轄下の武威郡として名前が現れ、清代では涼州府の管轄下の武威県である[梁1997：1-6]。本稿は涼州の範囲を明代のものとする。取り上げる碑刻史料の多くが明代に建立されたものだからである。現在の地名について述べる際は武威市とする。また本稿で述べる寺院も武威市内に限定される。

2　コデンとサキャ・パンディタとの施主—応供僧関係の構築が起源とされるモンゴルへのチベット仏教世界の拡大についての最新の概説として石濱・松川［2010：62-77］がある。

3　涼州のチベット仏教については、蒲［1990］、梁［1997］、黎［2002］によるチベット仏教寺院の概説があるのみである。

4　ＤＧはアムドのチベット仏教についての最も総合的かつ詳細な記述がなされてい

解説を収録した王其英［2001］が出版された。その中には明清時代の涼州のチベット仏教に関連する碑刻もある。これらの碑刻史料は、編纂史料の情報の少なさを補うものであり、詳細な検討を行なえば涼州のチベット仏教史が明らかになると考えられる。

筆者は2009年８月25日に近年中国政府によって修復された涼州のチベット仏教寺院白塔寺を訪問し、同寺にあった碑刻史料の調査を行なうことができた[5]。これは研究が進んでいなかった涼州のチベット仏教史についての手がかりになると考えられる。本論では、その成果を中心にして涼州のチベット仏教寺院とそれについての漢語・チベット語碑刻史料の概要を述べる。なお、碑刻の文面とその歴史的背景の詳しい検討や考察は今後の課題としたい。

1.　涼州について

７世紀―11世紀の涼州を含む河西回廊は、東西交通路の要地として漢人、チベット人、ウイグル人、ソグド人等の諸民族が混淆する多民族・多言語地域であった［前田1964, 武内2002, 高田2002[6]］。そして、涼州には漢文・西夏文で刻された「重修護国寺感応塔碑[7]」、漢文・モンゴル語ウイグル文で刻された「西寧王忻都公神道碑」がある[8]。これらの多言語碑刻は涼州及び河西の地域性を表す史料である。

現在の武威市内ではチベット人の姿は見ることができないものの、乾隆『五涼全志』の域図には武威県城の周囲に「番民」の集落や「番僧」の住持する寺院が記されており［３葉裏―４葉表］、18世紀頃まではチベット系の集団やチベット仏教寺院が存在したと考えられる。なお武威市の南にある天祝蔵族自治県

るチベット語編纂史料であり、梁［1997］も主にそれに依拠して涼州のチベット仏教寺院史を述べている。しかし後述する同書の涼州のチベット仏教に関する記述を他の地域と比較すると、化身ラマや寺院の座主の伝記、施主となった豪族の一族史が無く、この点からその記述は簡略なものといえる。

5　真宗総合研究所一般研究渡部班による甘粛訪碑調査の一環である。

6　武内［2002］によれば河西においてはチベット帝国支配以降はチベット語が共通語として使用された。

7　1094年に建立。研究は西田［1964］、Dunnell［1996］がある。

8　1362年に建立。研究はCleaves［1949］、亦隣真［2002］がある。

にはチベット人が現在も多く居住している。[9]

2.　今回調査•訪問を行った寺院１：白塔寺(Tib. shar sprul pa sde)[10]

2.1.　白塔寺の歴史について

寺院の歴史の概説については王宝元[1993]、発掘報告については中国社会科学院考古研究所、甘粛省文物考古研究所［2003］（以下、社・文［2003］とする）がある。白塔寺は武威市の東南20キロの武南鎮百塔村にある［社・文2003：52]。チベット語ではシャルトゥルパ寺　(Tib. shar sprul pa sde)[11]、漢語では百塔寺、または白塔寺という。[12] 王宝元［1993］はサキャ・パンディタの死後に彼の遺骨を納めるチョルテンが建立されたことが寺院の起原としている。元末に破壊されたが、宣徳５～６年（1430-31）と康熙14年（1675）に修復された。その後、1927年の地震で一塔を残して崩壊した。

白塔寺の建立について王宝元［1993：75］は、後述する康熙壬戌（21年、1682）「重修塔院碑」の記述を根拠として、サキャ・パンディタが1251年に亡くなった後にコデンが彼の舎利を納めるチョルテンを建立したと述べている。しかし杉山[2004：474]によればサキャ•パンディタを涼州に招いたコデンは1247～48年の間に亡くなっているので、王宝元［1993］の記述は疑問がある。同寺の建立については、王宝元［1993］が用いていないサキャ・パンディタに関する基本史料ＳＭ[13]には、サキャ・パンディタはトゥルパ・ハカン（Tib. sprul pa'i lha khang）という寺院で死去したことが述べられている［f. 72a5-6]。またＢＮＮ

9　天祝蔵族自治県の現況については別所・海老原［2007］を参照。同研究によれば現地のチベット語ではこの地域一帯を「ホワリ」（Tib. dpa' ris）と呼称するが武威市まで含まれるかどうかは不明である。同自治県には蔵族を自称する漢族が多い事やチベット人においても「ホワリワ」と称する現地出身のチベット人と「ワイェンパ」と称する外来チベット人に二分されるように複雑な民族状況があるようだ。

10　2009年８月25日訪問。

11　東方の変化の寺院という意味である。

12　白塔寺という名前はサキャ・パンディタのチョルテンからつけられた名前であり、百塔寺はその周囲を多くのチョルテンが囲んでいることから名づけられた［王宝元1993：74]。シャルトゥルパ寺という名前は多数のチョルテンがダキニの変化に喩えられたことから名づけられたとされる［DG : f. 171a2-3]。

13　ＳＭについては目片［2006］を参照。

Gにはサキャ・パンディタの甥で大元ウルスの帝師となるパクパが涼州（Tib. byang ngos）でサキャ・パンディタのチョルテンの落慶法要を行なったことが述べられている［f. 48b2-3］[14]。これらのことから、サキャ・パンディタの生前には寺院が既にあり、彼の死後パクパによってチョルテンが建立されたと考えられる[15]。

2.2.　中華人民共和国による寺院の修復事業

先述したように白塔寺は1927年の地震で施設が崩壊し、僅かに一塔が残っていた［写真1］。1992年から2003年にかけて現在の形に修復され［写真2］、これに対応するかたちで、1993年に白塔寺の歴史的背景を述べた王宝元［1993］、2003年には発掘報告である社・文［2003］が発表される。両者ともサキャ・パンディタとコデンの会見をチベットが中国の版図に入った歴史的事件としてとらえ、そのモニュメントとして白塔寺を位置づけている。

また、寺院の敷地内に「涼州会談紀念館」があり、白塔寺や近辺にある亥母

14　原文は「〔1254年〕ラマ（パクパ）はチャングーにいらっしゃって法主（サキャ・パンディタ）のチョルテンの落慶法要をなさってウィ・ツァンに行かれた（bla ma byang ngos su byon te chos rje'i sku 'bum la rab gnas mdzad nas dbus gstang du byon te/）」と述べられている。文中にあるチャングー（Tib. byang ngos）がどこの地名を指しているのかについては諸説がある。Stein［1951：232］は甘州（kan-tcheou）に比定する。Pelliot［1961：143］ではP. t. 1263文書を根拠として地名ではなく北側（côté du nord）と訳す。西田［1970：112］では『西番館雑字』を根拠として、百濟［2004：77］では「栴檀瑞像中国渡来記」のチベット訳と漢語訳を対照して、それぞれ涼州に比定する。この場合のチャングーについては、SMに「〔サキャ・パンディタは〕チャングーの涼州に到着なさった（byang ngos ling chur gdan phebs）［f. 68a6］」と述べられており、またパクパがサキャ・パンディタの死去を知らせた書簡であるCSBは1252年に涼州（Tib. ling chu）で書かれているので［f. 321b6］、1253年にフビライ（Tib. se chen）に招請されて一時的に離れることはあっても［BNNG : f. 48b2］、この時期のパクパは涼州を活動の本拠としていたと考えられる。そのためここではチャングーをとりあえず涼州とする。

15　白塔寺の歴史について、後述する宣徳5年（1430）「重修涼州白塔志」［1-8行］では、寺院の起源は不明であるが西夏（Tib. mi nyag）の時に寺院が修復され、コデンがサキャ・パンディタを居住させ、その後にパクパがサキャ・パンディタのチョルテンを建立したと述べられている。

写真 1

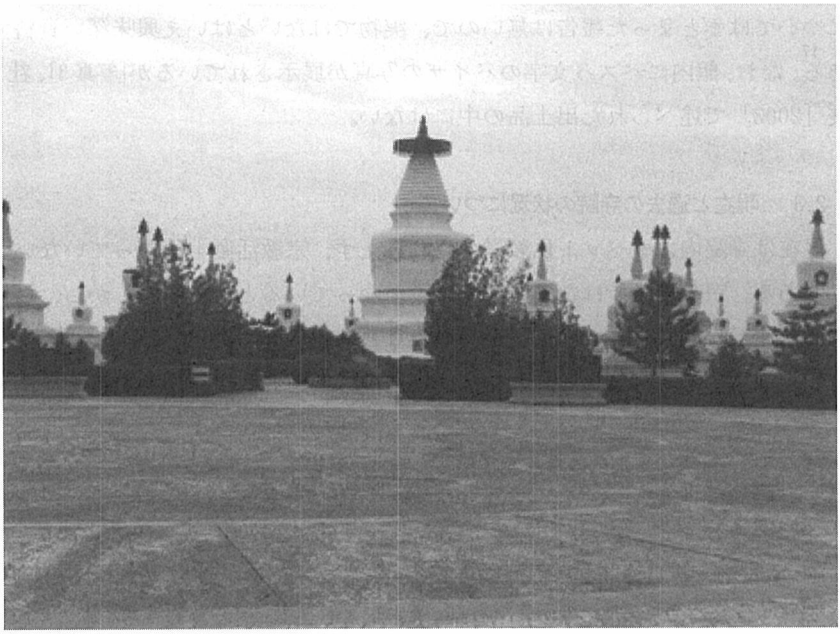

写真 2

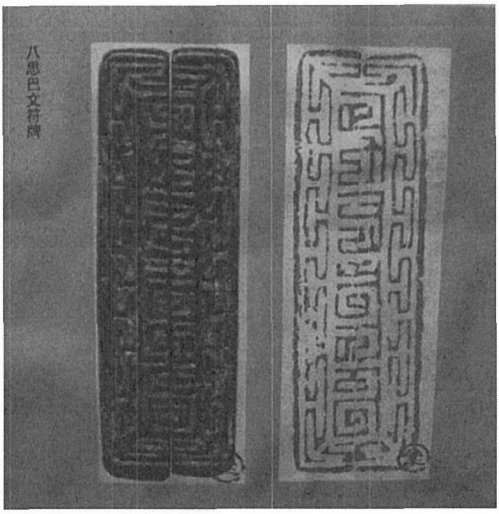

写真 3

洞の出土品のレプリカや写真を展示している。[16] 社・文［2003］によれば白塔寺の出土品には瓷器、瓦やレンガ等の建築物、漢文・チベット文の経典等の仏教遺物があり、その一部が展示されていると考えられる。また、亥母洞の出土品についてはまとまった報告は無いので、実物ではないとはいえ興味深い資料である。[17] なお、館内にパスパ文字のパイザの写真が展示されているが[写真 3]、社・文［2003］で述べられた出土品の中にはない。

2.3.　現在と過去の寺院の状況について

現在は寺院内にチベット仏教僧の姿は見えず、宗教活動も行なっていないようである。宗教施設ではなく、観光施設になっているといえる。しかし、ＤＧには仏像が安置されている仏殿があったことが記されている[f. 172a2-3]。また後述する康熙壬戌「重修塔院碑」には修復の際に僧侶の居住する建物を新築し

16　同じく寺院の敷地内の事務所と売店を兼ねた建物に「涼州蔵族研究所」というプレートが掲げられていたが、どのような活動を行なっている機関なのかは調査できなかった。

17　亥母洞については管見できる限りでは黎大祥「武威亥母洞寺遺址清理記」［黎 2002：218-220］が唯一の研究である。それによれば西夏文の仏教典籍が出土したと述べられているが、紀念館には展示されていなかった。

たことが述べられている。ここから遅くとも18世紀から19世紀まで寺院として活動していたことが考えられるが、ＤＧには同寺の化身ラマや学僧及び学堂に関する記述が無いため、学問寺として機能していたかどうかは不明である。

2.4.　白塔寺の碑刻①：宣徳５年（1430）「重修涼州白塔志」

片面漢文•片面チベット文、碑高51.8cm、碑寛31cm、碑厚6cm[王元宝1993：75]。拓影は社・文［2003：64-65］に収録され[18]、漢文の録文が宿［1996：265]、梁［1997：211-212]、王其英［2001：98-99］に、チベット文の録文が喬高才讓［1993：145-146］にある。紀念館には拓影と考えられるものがポスターにあった[写真4]。またレプリカが展示されている。現物は個人藏とのこと[19]。王宝元［1993：75］は劉喇嘛が保存していると述べる。拓本、原碑は実見できず。

碑刻の出土状況について述べる。碑文の漢文面［13行］及びチベット文面［18行］に本碑文をチョルテンの中に入れるという記述があり、梁［1997：211］は1927年の地震でチョルテンが崩壊した時に伏鉢より出土したと述べる。また、ＤＧは後述するように涼州のチベット仏教寺院の記述の出典として碑刻（rdo ring)を挙げていることが多いが、白塔寺の記述においては本碑刻を用いた形跡が無い[20]。その理由は碑刻がチョルテンの中に納められていたので外部の人間が参照できなかったからだと考えられる。

内容は漢文面、チベット文面共に、白塔寺がサキャ・パンディタの死後に彼のチョルテンが建立されたこと、宣徳４年（1429）にチベット系僧侶ソナムギャルツェン（Tib. bsod rnams rgyal mtshan）の要請を受けて明朝が白塔寺を修復したことを述べる。福田・石濱［1986：29］によれば中国側の文献にはサキャ・パンディタに関する記事はみえないので、本碑刻は彼に言及した数少ない漢文史料と言える。またチベット文面の記述にある白塔寺が西夏（Tib. mi nyag）の時に修復されたこと［４行］、サキャ・パンディタのチョルテンがパクパ（Tib.

18　これに収録されている拓影は判読し難い箇所が多い。

19　2009年８月25日紀念館館員談。

20　ＤＧの白塔寺が明の初期に修復したことを述べた部分は本碑刻の記述と重なっているが、出典は碑刻（Tib. rdo ring）ではなく文書（Tib. yi ge）をあげている［f. 172a1-2]。また本碑刻ではソナムギャルツェンが白塔寺修建の中心人物として述べられているが、彼の名前はＤＧの白塔寺の修復に関する記述には出てこない。

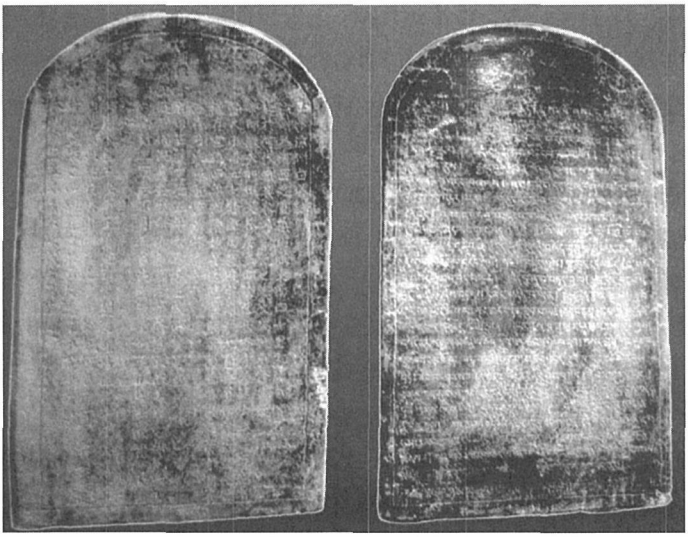

写真 4

'phags pa）によって建立されたこと［7－8行］等は漢文面には無い。両者の記述を比較することで、漢文化とチベット文化の違いの一端が明らかになると考えられる。なお、本碑刻ではサキャ・パンディタとコデンの会見についてふれているが、漢文面［3－4行］、チベット文面［5行］ともにコデンがサキャ・パンディタを招請したと述べており、双方ともチベットのモンゴルへの従属ではなく施主による高僧の招聘という仏教的価値観に基づいた記述になっている。

2.5.　白塔寺の碑刻②：宣徳6年（1431）「建塔記」

塔内より出土、碑陽・碑陰共に漢文、碑高40cm、碑寛25cm［王宝元1993：75］。拓影は社・文［2003：66］。碑陽の録文が宿［1996：265］、梁［1997：212-13］にある。紀念館には実物が展示されていた［写真5］。但し碑陽は確認できず。また拓本も実見できず。内容は宝塔の建立に関するものである。

2.6.　白塔寺の碑刻③：康熙壬戌（21年、1682）「重修塔院碑」

碑陽・碑陰共に漢文。碑首高80cm、碑首厚27cm、碑身高140cm、碑身寛77cm、碑身厚27cm［社・文［2003：63-64］。拓影は社・文［2003：67］、碑陽の録文は宿［1996：265-266］、梁［1997：213-215］、王其英［2001：130-131］に

写真５

ある。

碑刻は残っていた一塔の脇にあり、碑刻自体は建築物によって保護されているが、文面は磨耗が進んでいる［写真６］。碑陰については社•文［2003：64］は拓本を収録していないが、刻人の名前が記されていると述べる。しかし筆者の実見によれば碑陰に記されている人名は数が多く女性の人名もあるので施主の人名だと考えられる。[21] また碑首も社・文［2003：64，67］は拓影を収録していないが、筆者の実見によれば「重修塔院碑」という表題がある。碑陽の本文の表題は「重脩白塔碑記」とある。

内容はサキャ・パンディタの死後のチョルテンの建立とそれに伴って生じた奇跡を述べるものである。宣徳５年「重修涼州白塔志」よりもサキャ・パンデ

21　碑陰の施主名は判読できた限りではほとんどが漢名である。

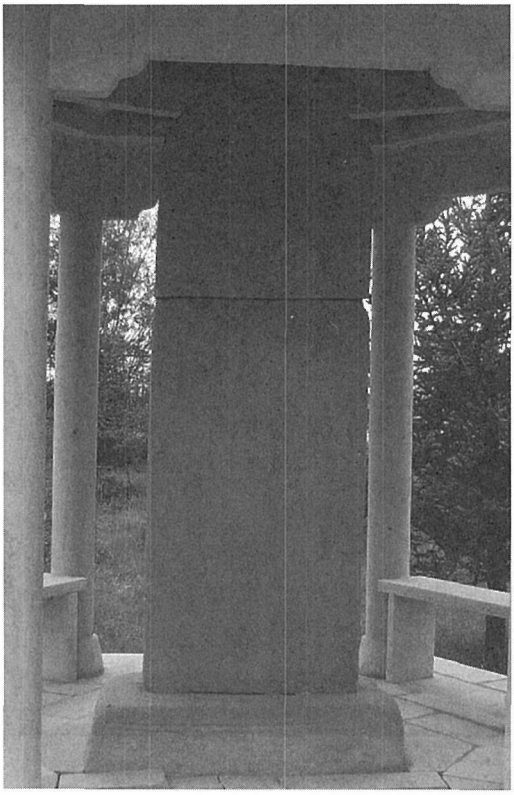

写真 6

ィタの僧侶としての神聖さを強調する記述になっている。[22] また注目すべきはサキャ・パンディタを示す語である「板只達」の文字に最も重い敬意を示す表現である擡頭を行なっていることである。[23]「重修涼州白塔志」の漢文面では「帝師撒失加班支答」の文字に擡頭よりは低い敬意を示す改行平出を行なっていることと比較すると、サキャ・パンディタに対する評価の変化が現れていて興味深い。本碑刻の建立の歴史的背景については、チベット、モンゴルに対する清朝

22　宣徳5年（1430）「重修涼州白塔志」の漢文面ではサキャ・パンディタを「帝師撒失加班支答」としているが本碑刻では「神僧板只達」、「聖僧板只達」としている。またサキャ・パンディタが涼州各地の寺院を建立したという記述が新たに付け加えられている。なお、サキャ・パンディタは大元ウルスの帝師にはなっていない。

23　文章の途中で改行して一字上げや二字上げを行なうこと。

の優位が確立されていなかったこの時期の内陸アジアの情勢と併せて検討する必要があるだろう[24]。これについては後述する。

2.7.　白塔寺の碑刻④：万暦（1573-1620）「カルマパ碑」（仮名）

チベット文編纂史料であるＤＧにはカルマパの化身ラマ•ギャルツェン（Tib. karma ba sprul sku rgyal mtshan）がアルタン・ハン（Tib. a stan rgyal po）やオルドスのビンドゥ（Tib. ur tu si be thu）に招かれたことと、モンゴルと中国の軍隊が戦った時にカルマパの僧侶が両者を調停したためカルマパのチョルテンを保護する命令を万暦帝が出したことを述べる箇所がある。この記述は碑刻（Tib. rdo ring）を根拠としている［ff. 173b1-174a1］。しかしこの碑刻についての拓本・録文の情報を筆者は得ていない。

3.　今回調査•訪問を行なった寺院２：海蔵寺（Tib. rgya mtso sde）[25]

3.1.　寺院の概況

武威市内より西北2.5キロメートルにあり、1248年に建立された。サキャ•パンディタがこの地で説法を行ないコデンの病気を治療した。しかし現在の寺院にはモンゴル時代の遺跡は無い［以上の記述は梁1997：221による[26]］。なお、ＳＭにはサキャ•パンディタがコデンの病気を治療した記述があるが［f. 68b4-70a2］、同寺に関する記述はない。

3.2.　寺院の現状

現在の寺院にはチベット文化の痕跡は無い。王其英［2001：108-109］によれば成化22年（1486）「成化御勅修海蔵寺碑記」、成化23年（1487）「銭璡張太監重修海蔵寺碑記」が、梁［1997：224-225］によれば乾隆元年（1736）「海蔵寺蔵経閣

24　本碑刻が建立された1682年は三藩の乱が終わった直後である。清朝がジュンガルのガルダンを破ってチベット、モンゴルに対する一定の優位を確立するのは1696年のズーンモドの戦いの後である。

25　2009年８月25日訪問。

26　梁［1997：221］はこの記述の典拠を示していないが、ＤＧ［f. 170a6］に同じ記述があるので同書に基づいたものだと考えられる。

写真 7

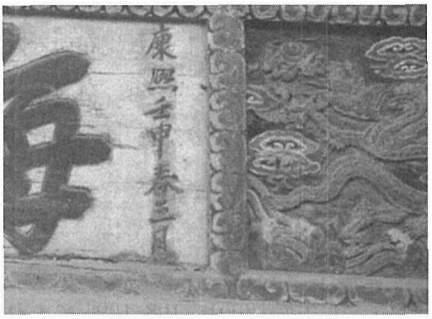

写真 8

写真 9

碑」、乾隆54年（1789）「修葺碑記」が同寺にある碑刻史料である。[27] 寺院内には二基の碑があり、これらの内のいずれかだと考えられるが、詳細な調査はできなかった。

また、寺院の入り口には康熙壬申（31年、1692）3月に清朝の振武将軍孫思克によって建立された牌楼がある［写真 7、8、9］。孫思克は清朝の漢軍正白旗人。

27　王其英［2001：108-109］、梁［1997：224-225］に収録されている録文を参照する限りでは、チベット仏教に関する記述は無い。

康熙２年に甘粛総兵官に任じられてから康熙39年に死去するまで西北方面の軍事を担当する。三藩の乱やジュンガルとの戦いに功績がある。[28] 康熙31年３月には孫思克は太子少保、騎都尉世職を授与されているので［『清史列伝』巻11］、牌楼はその記念に建立されたと考えられる。

この牌楼の建立のより大きな歴史的背景として、康熙壬戌「重修塔院碑」の項でもふれたが、清初の西北情勢がある。順治初年より康熙20年代まで清朝は嘉峪関までをその勢力圏としていたが、康熙20年代より甘粛や青海でジュンガルの勢力と衝突するようになった［承志2009：81-83］。特に河西回廊にはジュンガルのガルダンの勢力が強く及んでいた。例えば、涼州に隣接する甘州に居住する部族である西爾古兜（サリク・ウイグル）はガルダンの貢納民であり、彼らは弾薬の原料となる硫黄・倭鉛をガルダンに送っていた［佐口1963：17-18］。このように河西回廊において清朝とジュンガルの勢力が対峙する情勢が、康熙壬戌「重修塔院碑」やこの牌楼の建立の背景にあると考えられるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

4.　今回調査・訪問できなかった寺院と碑刻：天梯山石窟寺院

4.1.　天梯山石窟について

北涼の蒙遜により412-413年の間に開かれた。1959年に黄羊ダムの建設により大部分が水没する。仏像・壁画は甘粛省博物館に、チベット文を含む経典類は蘭州の敦煌研究所に保管されている［以上の記述は気賀沢1999による］。

4.2.　天梯山石窟の碑刻①：正統13年（1448）「重修涼州広善寺碑」

天梯山石窟内の広善寺にある［梁1997：252］。[29] 片面は漢文、片面はチベット文である。拓影は敦煌研究院・甘粛省博物館［2000：173-174］。漢文の録文が梁［1997：252-254］にある。内容は明朝が同寺を修復した事を述べるものである。なおＤＧに広善寺に関する記述があり、その一部は碑刻（Tib. rdo ring）を根拠にした部分がある［ff. 165a5-166a6］。その内容は「重修涼州広善寺碑」と

28　伝記は『清史列伝』巻11、『孫思克行述』がある。

29　広善寺は大仏寺ともいい、天梯山石窟の第13窟の近くにある［史岩1955：93］。寺院にあるチベット仏教様式の仏像、仏画、仏具、チベット文経典は1927年の地震で地下に埋まったとされる［史岩1955：78-79］。

重なっているので、ＤＧは「重修涼州広善寺碑」を史料として用いている可能性が高い。

4.3.　天梯山石窟の碑刻②：正統７年（1442）「重修白蓮寺（白林寺）碑」（仮名）

ＤＧにはペーリン寺（Tib. p'e lin zi, 白蓮寺？白林寺？）についての記述がある［ff. 166b1-167a1］。それには同寺は広善寺の近辺にあるカルマ派の修行場であり、明の永楽帝が修理し、さらに正統７年に大監リグ（Tib. li gu, 李貴？）、チベット僧侶ソナムギャルツェン等が修復したことが述べられているが、碑刻(Tib. rdo ring）に記述の根拠を置いている。

しかしこの碑刻についての拓本・録文の情報を筆者は得ていない。ＤＧの広善寺の近辺にあるという記述から同寺は天梯山石窟内にあると推測されるが、1955年頃の石窟の状況を述べた史岩［1955］には同寺に関する記述は無い。

さて、これらの天梯山や白塔寺等のチベット仏教寺院における漢文・チベット文対訳碑刻の建立の歴史的背景として、涼州を含めた河西仏教の歴史があると考えられる。それは五胡十六国時代から西夏、元に至るまでの訳経事業に代表される多民族多言語の仏教僧の活動である。

大元ウルスにおいては楊璉真加（Tib. yang rin chen skyabs）[30]を代表とする河西出身の仏教僧が仏教行政に関わった[31]。彼らは西番（チベット）僧とともに南宋皇帝の陵墓を発掘して江南に大きな反響を起こした［乙坂2010：193］。また法制上において河西僧は漢民族僧とは異なる扱いを適用されていた［乙坂2010：272］

その中で河西の多民族多言語性を表している僧侶が沙囉巴である[32]。彼は河西出身でパクパの弟子であり、江浙や福建の釈教総統を務め、延祐元年（1314）に

30　乙坂［2010：271］が楊璉真伽の名前のチベット語の比定を検討しており、楊は漢語とし璉真伽を rin chen skyabs とする Franke［1981：321］の見解を妥当とする。

31　大元ウルスの仏教行政に関わった河西出身者については史金波［1988：201-205］に概説がある。なお、楊璉真加については史金波［1988：204］では西夏僧としている。他の人物は河西僧としているのでこれとどのように異なるのか不明な表現である。陳［1986］では楊璉真加を河西僧としている。

32　Franke［1981：321］では沙囉巴をチベット語の shar pa とするが、乙坂［2006：209］は『秋潤先生大全集』巻22中にある「沙囉巴、華言吉祥慧」という記述を根拠にチベット語の shes rab dpal とする。shes rab は知恵、dpal は吉祥の意である。

56歳で死去しているが、注目すべきは訳師としての活動である。彼はフビライがパクパの教えを受ける時は通訳を務め、後にフビライの命令で密教経典を翻訳した。[33] 代表的な業績としてはパクパの著作 *shes bya rab gsal* を漢訳した『影所知論』がある［Franke1981 : 307］。[34]『仏祖歴代通載』中に「諸国の語言は皆学ばずして能くする」と讃えられた彼の活動から、多言語の会話や読み書きに通じた能力を通じて元朝の宮廷で重要な役割を果たした河西の仏教僧の姿が浮かび上がる。

そして大元ウルスの時代の河西における多言語多民族の状況を表すエピソードとして、至正20年（1360）に行なわれたカルマパ黒帽化身ラマ４世•ロルペードルジェ（rol pa'i rdo rje）の白塔寺訪問が挙げられる。ロルペードルジェは、順帝トゴンテムルの招請を受けて漢地に向う途中、涼州の白塔寺で説法を行なった。その際モンゴル（hor）、ウイグル（yu gur）、西夏（mi nyag）、漢人（rgya nag）の通訳が彼の左右につき、法話（chos gsungs）も交えた話をそれぞれ自分達の言葉に訳していったという［KPGT : Part II p. 491］。

大元ウルスの時代以降においても、明の洪武22年（1389）に河西もその範囲内にある陝西より番僧漢僧が来朝している。[35] また地域としては河西ではないが、洪武26年（1393）には河州衛に漢僧綱司と番僧綱司が設けられており、明初において西北全体に多民族他言語の仏教僧が活動していたことが伺える。以上のような歴史的文脈の中で涼州のチベット仏教寺院の漢文・チベット文対訳碑刻の建立事業の意味がとらえられると考えられるが、より詳細な検討は今後の課題としたい。

33　沙囉巴の伝記は『仏祖歴代通載』巻22［大正新脩大蔵経49巻］にある。なお『秋潤先生大全集』巻22では沙囉巴を「西番人」即ちチベット人とする。『仏祖歴代通載』の「河西之人」という記述と齟齬が生じるが、彼は河西出身のチベット人だと考えられる。『仏祖歴代通載』では沙囉巴の姓を「積寧」、諱を「沙囉巴観照」とする。『秋潤先生大全集』では沙囉巴の姓を「積寧」、諱を「沙囉巴観照」とし、彼の父の名前は「沙囉観」とする。このようにチベット語と漢語の合成した名前を持つ半漢化したチベット人はこの時代の中央チベットでは見られない。

34　『影所知論』は『大正新脩大蔵経』32巻に収録（No. 1645）。

35　『金陵梵刹志』巻２、13葉裏。

おわりに

今回紹介した碑刻史料から涼州のチベット仏教寺院が明・清に至るまで王朝の庇護を受けていたことがわかる。特に漢文・チベット文対訳碑刻が重要である。宣徳5年「重修涼州白塔志」のチベット文には漢文には無い記述があるが、碑刻に述べられている記述が漢文面とチベット文面ではどのように異なっているかということを他地域の碑刻をも併せて検討することが必要だと考えられる。漢文・チベット文対訳碑刻はアムドの他の地域にも見られる。例えば青海省にある瞿曇寺や甘粛省にある大崇教寺及び感恩寺である。しかしこれらの碑刻はその存在は紹介されているものの、その文面や歴史的意義の検討は今後の課題である。[36]

また、チベット文編纂史料からも碑刻の情報が得られる可能性がある。DGからは万暦「カルマパ碑」、正統7年「重修白蓮寺碑」のような他史料には無い碑刻の情報が得られた。DGは膨大な数の編纂史料の記述を引用しているが、碑刻史料を参照していることについては注目されていないようである。[37]

そして、今回の調査においては現碑や拓本を実見することが困難だった。例えば宣徳5年「重修涼州白塔志」の原碑を実見することができなかった。また拓本についても現地の研究機関が所蔵しているものを閲覧・入手するのは簡単ではないと考えられる。外国人研究者としては現地の研究機関との関係を深めつつ、公刊された史料を現地の研究者とは異なる視野の中で位置づける作業を行なうことが必要だろう。それはモンゴルと中国の境界であった涼州のチベット仏教が明朝・清朝の内陸アジア政策の中でどのような位置にあったのかとい

36　筆者は、伴［2005］において瞿曇寺にある永楽16年（1418）「皇帝勅諭碑」の文面を検討し、その文面が明朝の公文書の形式にそったものであることを証明した。また伴［2009］では永楽16年「御製金仏像碑」を検討することによって同寺が永楽帝の世界政策に組み込まれていたことを証明した。

37　その他にもチベット人研究者であるシャルワ・トグメーがアムドのシャルコク（Tib. shar khog, 松潘）の地方史史料の解説を行なっているが、その中で康熙もしくは光緒3年（Tib. gang zig）の年号が書かれたチベット文碑刻を紹介している［shar ba thogs med 2008 : 43-44］。ただし判読し難い小さい碑影があるのみで、拓影・録文は収録されていない。漢人の研究に比べたら精密とは言いがたいがチベット人研究者の成果も参照する必要がある。

う視点と、多民族他言語の仏教文化の交流の要地として栄えた河西回廊とその周辺の仏教寺院の歴史を、モンゴル時代以降のチベット仏教僧がどのように受け継いだかという視点であると考えられる。[38]

参考文献

和　文

石濱　裕美子、松川　節
2010 「後伝仏教の諸相」『須弥山の仏教世界』佼成出版社、pp. 50-119
上山　大峻
1990 『敦煌仏教の研究』法藏館
乙坂　智子
2006 「奇跡譚の生成―元仁宗期漢文文書におけるチベット仏教僧の造形」『横浜市立大学論叢（人文科学系列）』58-1/2、pp. 173-211
2010 「楊璉真伽の発陵をめぐる元代漢文文書」『横浜市立大学論叢(人文科学系列)』61-1、pp. 185-295
気賀沢　保規
1999 「中国武威・天梯山石窟の現状と歴史的背景」『明大アジア史論集』5、pp. 1-21
百濟　康義
2004 「『栴檀瑞像中国渡来記』のウイグル訳とチベット訳」『中央アジア出土文物論叢』朋友書店、pp. 71-83
武内　紹人
2002 「帰義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」『東方学』104、pp. 106-124（逆頁）
佐口　透
1963 『18-19世紀　東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館
承志
2009 『ダイチン・グルンとその時代』名古屋大学出版会
杉山　正明
2004 『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学出版会
高田　時雄
2002 「敦煌における多言語使用」『石窟寺院の成立と変容』平成10―平成13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書（本稿では京都大学人文科学研

38　甘粛省に位置し、天梯山石窟と同じく五胡十六国時代より栄えた炳霊寺にも15世紀後半よりチベット仏教ゲルク派の僧侶が進出し、17世紀前半より化身ラマが出現した［曹2006］。

究所 HP（http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takata/）に収録のＰＤＦ原稿を用いた）

西田　龍雄

1964 『西夏語の研究』座右宝刊行会

1970 『西番館譯語の研究』松香堂

1997 『西夏王国の言語と文化』岩波書店

伴　真一朗

2005 「アムド・チベット仏教寺院トツァン・ゴンパ（瞿曇寺）のチベット文碑文初考―永楽16年「皇帝勅諭碑」の史料的価値の検討を中心に―」『大谷大学大学院研究紀要』22、pp. 189-219

2009 「明初における東西の仏教交流と青海チベット仏教寺院―永楽帝の対外政策における瞿曇寺『御製金仏像碑』の役割―」『内陸アジア言語の研究』24、pp. 173-206

別所　祐介、海老原　志穂

2007 「チベット語天祝方言とその言語使用状況について」『京都大学言語学研究』26、pp. 77-91

福田　洋一、石濱　裕美子

1986 『西蔵仏教宗義研究』 第４巻、東洋文庫

前田　正名

1964 『河西の歴史地理学的研究』吉川弘文館

目片　祥子

2006 「『サキャパンディタ伝スンドーマ』について」『日本西蔵学会々報 』52、pp. 55-69

中　文

亦隣真

2002 「至正二十二年蒙古文追封西寧王忻都碑」『亦隣真蒙古学文集』内蒙古人民出版社、pp. 627-693（原載は1980年10月に行なわれた中国民族古文字研究会第二次学術討論会報告論文）

王　其英（主編）

2001 『武威金石録』蘭州大学出版社

王　宝元

1993 「涼州百塔寺考察記」『敦煌学輯刊』1993-1、pp. 72-76

喬高才譲

1993 「『重修涼州白塔志』碑文考略」『中国蔵学』1993-4、pp. 144-150

史　岩

1955 「涼州天梯山石窟的現存状況和保存問題」『文物参考資料』1955-2、pp. 76-96

史　金波

1988 『西夏仏教史略』寧夏人民出版社
宿　白
1996 「武威蒙元時期的蔵伝仏教遺跡」『蔵伝仏教寺院考古』文物出版社、pp. 264-274
曹　学文
2006 「蔵伝仏教在炳霊寺発展之述評」『炳霊寺石窟内容総録』蘭州大学出版社、pp. 286-302
中国社会科学院考古研究所、甘粛省文物考古研究所
2003 「甘粛武威市白塔寺遺址1999年的発掘」『考古』2003-6、pp. 52-69
陳　高華
1986 「略論楊璉真加和楊暗普父子」『西北民族研究』1986-1（→『陳高華文集』、上海辞書出版社、2005、pp. 211-226に再録。本文中の頁はこれによる。
敦煌研究院・甘粛省博物館
2000 『武威天梯山石窟』文物出版社
蒲　文成（主編）
1990 『甘青蔵伝佛教寺院』青海人民出版社
梁　新民
1997 『武威史地綜述』蘭州大学出版社
黎　大祥
2002 『武威文物研究文集』甘粛文化出版社

欧　文

Cleaves, Francis W.
1949 "The Sino-Mongolian Iinscription of 1362 in Memory of Prince Hindu" *Harvard journal of Asiatic studies*, Vol 12, pp. 1-133.
Dunnell, Ruth W.
1996 *The great state of white and high: Buddhism and state formation in eleventh-century Xia*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
Franke, Herbert.
1981 "Tibetans in Yüan China." *China under Mongol rule*, Princeton University Press, pp. 296-328.
Pelliot, Paul
1961 *Histoire Ancienne du Tibet*, Paris.
Stein, R. A
1951 "Mi-nyag et Si-hia, geographie historique et legendes ancestrales" *Bulletin de l'École Française*, 44, pp. 223-265.

チベット文

shar ba thogs med.
2008 "gnas chen shar phyogs dung ri dang 'brel yod bod yig dpe rnying 'ga'i ngo

sprod" *krung go'i bod rig pa*, 2008年 4 号.

参考史料

漢　文

『金陵梵刹志』明文書局、1980
乾隆『五涼全志』成文出版社、1976
『秋潤先生大全集』（『四部叢刊初編』）臺灣商務印書館、1975
『清史列伝』中華書局、1987
『仏祖歴代通載』（校訂版は『大正新脩大蔵経』No. 2036、影印版は『北京古籍珍本叢刊』77冊）
『孫思克行述』（『明清史料叢書八種』 3 冊）北京図書館北京図書館出版社、2005
『大正新脩大蔵経』大正一切経刊行会、 1927
『明太祖実録』中央研究院歴史語言研究所、1968

チベット文

CSB: chos rje pa bde bar gshegs dus dbus gtsang gi dge ba'i bshes gnyan rnams la sbring ba bzhugs, SKKB, Vol. 7, pp. 266-267.
DG: *deb ther rgya mtsho* (Part1). Lokesh Chandra ed, New Delhii 1975-77 (Shata-piTaka series.).
LBSS: *lam 'bras slob bshad*, sakya Centre, Delhi, 1983.
SKKB: *sa skya pa'i bka' 'bum*, 東洋文庫, 1968.
SM: *gsung sgros ma*, SKKB, vol 9, pp. 30-36.
KPGT: *mkhas pa'i dga' ston*, Shata-piTaka series, New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1959-1962.
BNNG: bla ma brgyud pa'i rnam par thar pa ngo mtshar snang ba, LBSS, ma,1a-61a.